

自閉症論のすぐれた見解

ブログの中で、私はしばしば子どもたちが医療機関で診断や判定をうけて、さまざま名前の発達障害ラベルを貰ってくると悪口を書きますが、お医者さんや心理判定員の診断名、判定行為を馬鹿にしているのはありません。

むしろ診断や心理的判定のお陰で、現場で子どもと向き合う者が、子どもの指導の目安と手だてを得るのです。

私が言いたかったことは、診断名や判定基準だけが一人歩きしている現状です。

診断や判定は、これから子どもたちがどのように生きていくのかの指針の一つであってほしいのです。

自閉症の症状はさまざまな名称で呼ばれています。

例えば、カナー型、アスペルガー型、広汎性発達障害、高機能発達障害、不定型自閉症等です。

子どもと向き合っている現場の先生方なら、子どもをこのように区分けすることには無理があることを知っています。

しかし、子どもたちは、このような名づけラベルはお医者さんから貰って来ます。

**生理的な病気と違って、精神的な診断には、
医療的判断を越えた差別的な世間の目が光るだけでなく、死ぬまでそのラベルを貼ったままです。**

アメリカの自閉症児を育てる保護者から、自分たちの子どもは、特別な生き方をしているわけでもなく、また、遠くの島に住んでいる孤独人でもない。

ただ、**一般の人とは考え方や行動が違うだけだ**と声を上げ始めました。

アメリカの精神科のお医者さんたちの中で、自閉症と言っても一つの形にはまる人は少なく、多くは二つ三つの症状を兼ね合わせていることも周知でした。さらに、保護者の声が大きくなるにつれて、精神科のお医者さんの学会が、自閉症をいろいろな名づけで分けて来たが、自閉症状の現れ方が異なるだけで、基本的には皆な一連の流れにいる。

それ故に

「自閉症スペクトラム障害」と一本化した名前呼びましようと決めました。

(2013年米国精神医学会診断基)